

平成21年12月

中小企業の社長は元気が張っている

毎年12月10日が近づくと中小企業の経営者は憂うつになります。公務員や大企業の冬の賞与支給額予想が報道されるからです。東京都の職員は不況でも平均100万円を超えるのではないのでしょうか。大企業では15~16%下がっても70万円を超えています。中小企業の調査でも40万円を超えています。何故このような結果になるかといえは、大企業は150社位の日本を代表する優良企業のみ情報だからです。上場企業約4,000社の平均をとるともっと低いはず。中小企業ではアンケートを集計して調査します。回収率は20%以下です。どういふ会社が回答するか想像してみてください。業績のよい会社が賞与の支給額が高い会社です。中小企業といっても社員100人以上の中会社です。平均勤続年数は16~18年と長く働いています。多くの中小企業の勤続年数は10年以下であり平均年齢も30歳代です。マスコジの報道している会社と我々中小企業では規模も平均勤続年数も平均年齢も全く違っているのに多くの社員が自分の賞与と報道される賞与を比較して寂しい思いをします。古田土会計では社員が賞与が出ることに感謝してくれています。年末調整を委託しているので中小企業の実態を実感しているからです。500社超の530弱の企業が賞与がなく、今年の夏は平均支給額は23万円でした。平均社員数26名です。今年の冬は20万円位に落ちたのではないのでしょうか。大企業の社長は会社が赤字でも自分の給与はほとんど下げません。銀行借入の保証もしません。会社がつぶれても個人財産は守られます。ところが中小企業は業績が悪くて赤字でも借金にまで賞与を支払っている会社があります。その賞与が少ないと社員が文句を言われています。また少ない額であることが社員に申し訳ないとして謝罪している社長もいます。個人保証や自宅を担保にまで借金して社員に給与や賞与を支払っている社長の姿を見て、自分もその立場に立たなければならないように思われる。立派なことだと思われ。役員の役員や社員とそんな報酬に差があるわけでもないのに差の青です。そんな社長の気持ち、役員や社員はなかなかわかってくれません。赤字でも中小企業はつぶれるのがあたりまえです。つぶれない会社にするためには社員には想像もできない苦勞があるのに、それを口に出すと器が小さく思われるので誰にも話さず我慢します。社員から社長に落ちる人もいます。社長に落ちると個人保証、担保提供による資金調達がしなげればならないので全財産がなくなることもあります。そんな立場に理解する奥さんがいるのでしょうか。普通の人には引き受けられないと思います。役員まで社長に落ちる批判を受けられないほうが得です。いつつぶれるかわからない中小企業の社長は人生の傷業を